

慈眼山遺跡 7 次

2010 年

日田市教育委員会

序 文

古来より九州の交通の要所であった本市には、多くの文化財が市内各所に残されており。とりわけ市内北部を流れる花月川と有田川の合流部に位置する慈眼山は、中世日田の支配者であった大蔵氏の居城跡として知られ、その周辺部には数多くの遺跡の存在が知られています。

本書は、そのなかでも平成19年度に分譲地造成工事に伴って発掘調査を行った、慈眼山遺跡の調査内容をまとめたもので、遺跡の調査では、中世後期の集落跡などが発見されました。

本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解と保護につながり、地域の歴史の解明や学術研究等にご活用いただければ幸いです。最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

日田市教育委員会

教育長 合 原 多賀雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成19年度に実施した「慈眼山遺跡7次」の発掘調査報告書である。当初の契約時は「上ノ馬場遺跡3次」としてきたが包蔵地の名称変更に伴い、遺跡名を「慈眼山遺跡」と改める。
2. 調査地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である「慈眼山遺跡」に含まれるが、過去この遺跡の範囲は「慈眼山瀬戸口遺跡」・「上ノ馬場遺跡」に分かれていた。平成20年度には、両者の遺跡内容がほぼ同一で、範囲の断絶も認められないことから、「慈眼山遺跡」に名称を統一して登録した。しかし、これまでの発掘調査では、それぞれの遺跡名称で調査地が設定されており、一部混乱をきたしている。そこで、これまで慈眼山遺跡の範囲内において行われた調査を6回の調査として再設定し、今回報告を「上ノ馬場遺跡3次調査」⇒「慈眼山遺跡7次調査」と変更する。なお、今回整理し直す6回の調査名の整合については本文中1に記載するので、そちらを参照いただきたい。従って、これまで「上ノ馬場遺跡3次」として報告してきたものに関しても、今回以降「慈眼山遺跡7次」と改める。

※「上ノ馬場遺跡3次」『平成19年度（2007）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2008

3. 調査は分譲住宅造成工事に伴い、丸善株式会社の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
4. 調査現場での実測及び写真撮影は若杉・渡邊が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測は渡邊が行い、比嘉の多大なる協力を得た。遺構・遺物のレイアウト・製図は渡邊のほか、比嘉・中川照美（文化財保護課整理作業員）の協力を得た。
6. 空中写真撮影は九州航空株式会社に委託し、遺物の写真撮影は雅企画有限会社の委託による。
7. 挿図中の方位は全て磁北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。
8. 写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
9. 出土遺物及び図面・写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 本書の執筆編集は渡邊が担当した。



日田市の位置

本文目次

I はじめに	
(1) 調査に至る経過と組織	1
(2) 慈眼山遺跡のこれまでの調査	2
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の記録	
(1) 調査の概要	4
(2) 層序と整地層	4
(3) 遺構と遺物	
1. 掘立柱建物・柱穴列	7
2. 溝	8
3. 土坑	12
4. ビット	15
5. その他の遺物	16
IV まとめ	
(1) 日田市内出土の14～16世紀 の土師質土器の変遷と年代	18
(2) 7次調査の遺構の時期	21
(3) 慈眼山遺跡の特徴と評価	22

挿図目次

第1図	調査地位置図 (1/7,000)	2
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図	周辺地形図 (1/750)	4
第4図	調査地全体図 (1/125)	5
第5図	基本土層図 (1/40)	5
第6図	整地層出土遺物実測図 (1/4)	5
第7図	1・2号掘立柱建物実測図 (1/60)	6
第8図	3・4号掘立柱建物・1号柱穴列実測図 (1/60)	7
第9図	建物・柱穴列出土遺物実測図 (1/4)	8
第10図	溝実測図 (1/40、1/60、1/80)	9
第11図	溝出土遺物実測図 (1/4)	11
第12図	土坑実測図 (1/40)	13
第13図	土坑出土遺物実測図 (1/4)	14
第14図	ビット出土遺物実測図 (1/4)	15
第15図	その他の出土土器実測図 (1/4)	16
第16図	出土瓦実測図 (1/6)	16
第17図	出土金属器実測図 (1/2、1/3)	16
第18図	出土木器実測図 (1/2、1/3)	17
第19図	土師質土器の変遷素案	20

写真図版目次

図版 1	上段 調査地遠景 (慈眼山を望む)
	下段 調査地全景 (真上から)
図版 2	① 1号建物 P3
	② 1号建物 P4
	③ 1号建物 P5
	④ 1号建物 P6
	⑤ 1号建物 P7
	⑥ 1号建物 P8
	⑦ 1号建物 P9
	⑧ 1号建物 P10
図版 3	① 1号建物 P11
	② 2号建物 P2
	③ 2号建物 P6
	④ 3号建物 P3
	⑤ 4号建物 P1
	⑥ 4号建物 P2
	⑦ 4号建物 P3
	⑧ 4号建物 P4
図版 4	① 1号柱穴列 P1
	② 1号柱穴列 P2
	③ 1号溝 (東から)
	④ 1号溝土層

図版 5

⑤	2号溝 (南から)
⑥	2号溝土層
⑦	3号溝土層
⑧	7号溝 (南から)
①	7号溝土層
②	8号溝 (南から)
③	8号溝土層
④	8号溝遺物出土状況
⑤	9号溝 (南から)
⑥	9号溝土層
⑦	1号土坑 (西から)
⑧	1号土坑土層
①	1号土坑遺物出土状況①
②	1号土坑遺物出土状況②
③	2号土坑 (南から)
④	3号土坑 (南から)
⑤	3号土坑上面土層
⑥	5号土坑 (南から)
⑦	9号土坑 (北から)
⑧	竈尻出土状況

図版 6

出土遺物

図版 7

本文写真目次

本文写真 1	調査作業風景	1
本文写真 2	調査作業風景	1
本文写真 3	基本土層	5
本文写真 4	トレンチ 1	5
本文写真 5	トレンチ 2	5

表目次

第1表	調査地番号対応表	2
第2表	遺構番号対応表	5
第3表	出土土器観察表①	23
第4表	出土土器観察表②	24
第5表	出土瓦観察表	24
第6表	出土木器・金属器観察表	24

I はじめに

(1) 調査に至る経過と組織

平成19年8月24日付けで日善株式会社より市教育委員会に日田市上城内町1025番地で宅地分譲地造成工事に先立つ事前の照会文書（事前審査番号2007039）が提出された。この開発予定地は隣接する6次調査地の分譲開発に続くもので、周辺の埋蔵文化財包蔵地である慈眼山遺跡に該当し、また、6次調査では本発掘調査を実施していることから、その取り扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。その後の9月5日には予備調査依頼が提出され、これを受けて10月12日には重機を用いて予備調査を実施したところ、対象地全面に遺跡の存在が確認された。

こうした結果をもとに、開発主と遺跡の取り扱いについての協議を重ねたところ、予定地の造成は全面盛土工法にて行われるもの、造成地内に上下水道配管施設を伴う位置指定道路が設置されることから、この部分における遺跡の保存は困難であると判断し、農地転用許可後の11月に道路部分約188㎡の発掘調査を実施することとなった。そして、平成19年11月6日に事業主との委託契約を取り交わし、平成19年11月13日から12月20日の間、発掘調査を実施した。その後、平成20年5月1日から7月31日の間整理作業を実施し、翌平成21年度に報告書作成を行った。調査に関する日誌は以下のとおりである。

- 11月13日 機械を用いて表土除去を開始する。調査地内に水が流入するため、排水作業を実施する。
- 11月15日 遺構検出を開始し、ピット群の存在が明らかとなる。
- 11月19日 西側より遺構の掘下げを開始する。
- 11月28日 遺構の実測を開始する。
- 12月17日 遺構の掘下げ・実測作業がほぼ完了する。
- 12月18日 空中写真撮影を実施する。
- 12月20日 全ての機材の片付け・撤収を行い、調査を完了する。

なお、調査組織は次のとおりである。

平成19～21年度

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長〔～平成19年8月〕）

合原多賀雄（同教育長〔平成19年9月～〕）

調査統括 梶原孝史（日田市教育庁文化財保護課課長〔～平成19年9月〕）

原田文利（同課長〔平成19年10月～〕）

調査事務 井上正一郎（同文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長〔～平成20年度〕）

北村 羊（同主幹兼埋蔵文化財係長〔平成21年度〕）、田中正勝（同専門員〔～平成20年度〕）

伊藤京子（同専門員〔平成19年度〕、河津美広（同専門員〔平成21年度〕）、塚原美保（同主査）

調査担当 若杉竜太（同主任）、渡邊隆行（同主任〔予備調査担当兼〕）

調査員 今田秀樹（同主査）、行時桂子（同主査、〔～平成19年主任〕）、矢羽田幸宏（同主事）

比嘉えりか（同嘱託〔平成20年～〕）

調査作業員 江藤キミ子 河津定雄 五反田静子 後藤美知夫

財津利枝 筒井英治 原口勝利 原田強 平原知義

松間敦子

整理作業員 坂口豊子、佐藤みちこ



写真1 調査作業風景



写真2 調査作業風景

(2) 慈眼山遺跡のこれまでの調査（第1図、第1表）

序文でも触れたが、慈眼山遺跡の調査名称について整理する。調査地一帯の範囲は「慈眼山瀬戸口遺跡」・「上ノ馬場遺跡」に分かれていたが、平成20年度に「慈眼山遺跡」として統合し、名称変更を行った。しかし、過去の発掘調査ではそれぞれの遺跡名称で調査地が設定されているため、このまま名称を設定するのは混乱をきたす原因となる。そこで、これまで慈眼山遺跡の範囲内において行われた調査を6回の調査として再設定し、今回報告を「上ノ馬場遺跡3次調査」から「慈眼山遺跡7次調査」と変更する事にした。ただし、この中には予備調査は含めないものとした。

さて、今回整理した遺跡の名称については以下の第1表に記載する通りで、調査箇所は第1図に示すとおりである。県の調査分に関しては、平成2年度調査をA・B地区と分けていたが、それぞれ調査起因が異なっているため、今回別の調査年次として整理し1・2次と設定し直している。また、5・6次調査に関してはそれぞれ「慈眼山遺跡Ⅰ」・「慈眼山遺跡Ⅱ」として報告済であるが、今後それぞれを5・6次調査の報告とする。報告書のタイトルの記載についても、今後は「慈眼山遺跡〇次」と記載するものとし、これまで使用しているⅠ・Ⅱといったローマ数字は調査起因等が異なるため踏襲しないものとしている。



〔文 献〕

- 1 田中彰介編 1991『慈眼山遺跡（A地区）』大分県文化財調査報告書第85輯 大分県教育委員会
- 2 坂本嘉弘 1992『慈眼山 瀬戸口遺跡』国家公務員合同庁舎日田住宅2号棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 大分県教育委員会
- 3 行時志郎 2000『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 日田市教育委員会
- 4 渡邊隆行 2007『慈眼山遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第75集 日田市教育委員会
- 5 行時桂子 2008『慈眼山遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第84集 日田市教育委員会
- 6 渡邊隆行 2008『上ノ馬場遺跡3次』平成19年度（2007年度）日田市埋蔵文化財年報 日田市教育委員会

第1表 調査地番号対応表

第1図 調査地位置図 (1/7,000)

新調査名	旧遺跡名	旧調査名	報告書名	調査年度	調査主体	事業区分	調査理由	所在地	調査面積	調査月日	時代	遺跡の種類	事前調査番号	文献
1次調査	慈眼山遺跡	B地区		H12	市教委	公共	県教職員住宅建設	大字北豆田瀬戸口	700㎡	9月3日～12月	中世	集落		2に一部記載
2次調査	慈眼山遺跡	A地区	慈眼山遺跡A地区	H12	市教委	公共	国家公務員庁舎建設	大字北豆田瀬戸口	約100㎡	11月6日～11月28日	中世	集落		1
3次調査	慈眼山瀬戸口遺跡		瀬戸口遺跡	H13	市教委	公共	国家公務員庁舎建設	大字北豆田瀬戸口	1,200㎡	8月1日～1月31日	奈良・中世	集落		2
4次調査	上ノ馬場遺跡		上ノ馬場遺跡	H10	市教委	民間	住宅造成	大字北豆田上ノ馬場1032-1	400㎡	8月3日～8月22日	古墳・中世	集落		3
5次調査	慈眼山瀬戸口遺跡		慈眼山遺跡	H16	市教委	民間	宅地分譲	上城内町435-1	400㎡	2月17日～3月31日	中世	集落		4
6次調査	上ノ馬場遺跡	2次調査	慈眼山遺跡Ⅱ	H18	市教委	民間	分譲宅地	上城内町1023-1 様心	120㎡	6月12日～7月14日	中世	集落	2006008	5
7次調査	上ノ馬場遺跡	3次調査	慈眼山遺跡7次 (今回報告)	H19	市教委	民間	分譲宅地	上城内町1025	188㎡	11月13日～12月20日	中世	集落	2007039	6

II 遺跡の立地と環境

慈眼山遺跡¹は、日田市東部の通称慈眼山から佐寺原台地一帯の丘陵裾部に広がる標高85～90m前後の沖積地上に位置する。この一帯には水田が比較的多く残っているが、市街地に近いこともあり、宅地造成やアパート・商業施設などの各種開発が近年増加する傾向にある。そのため、調査地周辺ではこれまで数度の調査（第1図）が実施されている。調査地北東側の慈眼山遺跡2次調査地では15、16世紀の水路や堀、隣接する3次調査地では中世の堀や石垣状の遺構や十一面観音菩薩像が確認されるとともに、古代の井戸や墨書土器等が発見され、官衙関連施設の可能性が指摘されている。それより少し南の5次調査地では15世紀後半～16世紀の掘立柱建物や井戸跡、大規模な整地層が確認されている。南側の4次調査地では古墳時代の溝跡と15～16世紀の水路や井戸跡などが確認され、6次調査地では15世紀後半～16世紀の溝や土坑などが確認されている。また、さらに南側で予備調査を実施した日田糸里熊崎地区では中世の流路等が確認され、そのほか予備調査を行った事前審査番号2008001・2008061の箇所などでは溝や柱穴などが確認されている。これら調査の結果から慈眼山遺跡として包括された範囲には、ほぼ同時期に計画的に造営された大規模集落が広がっていたことが窺われる。また、遺跡の北側丘陵上の慈眼山山頂には、11世紀に登場し15世紀中頃まで日田を支配した大藏氏の居城跡とされる大藏古城跡²が残り、大規模な曲輪群や畝状堅堀や堀切などが随所に見られる。この慈眼山西端には平安末期創建とされる永興寺³があり、木造十一面観音菩薩像をはじめとする国指定重要文化財の仏像群が安置されており、この一帯が中世大藏氏の根小屋式城郭として栄えていたことを物語っている。

さて、これら慈眼山関連以外の周辺遺跡を見てみると、花月川を渡った北側の沖積地には中世の建物群が確認された日田糸里上手地区⁴が所在し、東側丘陵斜面には竪穴式石室を主体部とする円墳の丸山古墳⁵、台地上には弥生時代中～後期の集落が確認された佐寺原遺跡⁶、その台地先端部の崖面には夕田古墳⁷、夕田横穴墓⁸、佐寺原横穴墓等⁹の古墳時代の墳墓群が見られる。西側には豆田の城下町¹⁰が広がり、その北側には多数の横穴墓と城が築造された月隈城・横穴群¹¹、江戸時代に代官・郡代が置かれた永山布政所跡¹²がある。さらに豆田の西側には弥生～古墳時代の集落が確認された一丁田遺跡¹³が所在し、その奥の吹上台地上には弥生時代の大規模集落で、特定集団墓が確認された吹上遺跡¹⁴が所在する。南側の沖積地には古代の集落や墨書土器・方形堀方大型柱穴列などが発見された大波羅遺跡¹⁵、弥生～古代の集落が発見された日田糸里飛矢地区¹⁶などがあり、丘陵部には古墳時代の墳墓群が発見された赤迫遺跡¹⁷、埴輪の出土が確認された大型円墳の薬師堂山古墳¹⁸、丸尾神社古墳¹⁹などの古墳が点在している。このように慈眼山遺跡を中心とした一帯は弥生時代以降、生活の中心地として開発が盛んに行われてきた箇所であったと言える。



第2図 遺跡分布図 (1/25,000)

III 調査の記録

(1) 調査の概要 (第3図)

調査は試掘調査の結果を踏まえて、調査対象地西側より順次、遺構検出面まで機械で掘下げてから遺構の確認を行った。調査地は隣接する6次調査地の位置指定道路の延長にあたる道路範囲に該当する。一部調査不可能であった東西両端部分を除いた幅約6m、東西長約32.5mの長方形を呈し、面積は約188㎡で、ほぼ平坦ながらも若干西側に傾斜している。遺構検出面は暗黄褐色土層で、これに掘り込んだ遺構などが検出された。ただし、これらの検出面は地山ではなく、遺構群建築時に造成された整地層であることが確認され、整地層下面には粘質土が厚く堆積していた。

調査において検出された遺構は建物4棟、柱穴列1基、溝9条、土坑9基、ピット多数である。なお、建物復元は調査範囲が狭いため可能な範囲でしか実施していないが、ピットには柱木が見られるものもあることから、本来はさらに多くの建物が建っていたものと想定される。遺構埋土は部分的に1号土坑などに黒色土が見られるものの、大半が灰褐色土ないし淡褐色土であった。以下、遺構と遺物の説明を行うが、説明に用いた文献等は巻末に提示したものを利用した。また、整理段階において調査時の遺構番号と変更したものについては表2に記載している。

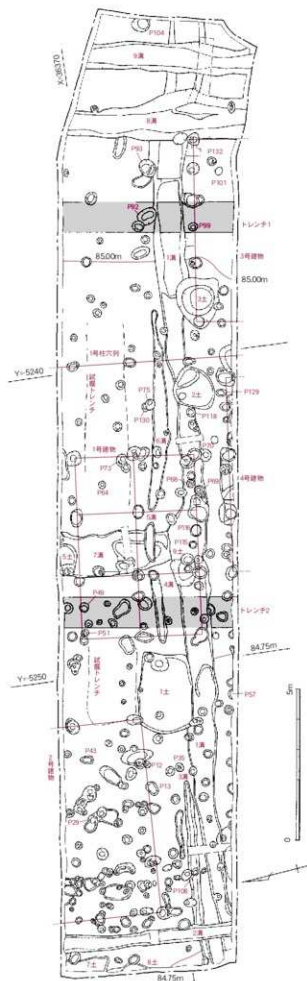
(2) 層序と整地層 (第4・5図、図版1)

遺構検出面は中世遺構群が構築される前に造成された整地層であると想定され、これは、隣接する6次調査地においても確認されている。そこで、調査完了後に一部範囲をトレンチ状に掘下げて層位と遺物包含状況の確認を行った。

各トレンチとも幅1m、長さ約6mを測り、整地層と思われる暗黄褐色土層を掘下げた。いずれのトレンチからも遺物の出土が見られた。整地層の下面には粘性の高い水を通しにくい層が堆積しており、整地層との境に水が流れていることが確認される。また出土遺物は、検出遺構出土遺物との明確な形態差は見出しがたいものの、明らかに古い時期と思われる遺物も含まれていた。恐らく、遺構群の構築時前後に大規模に造成されたものと思



※緑は宅地造成計画線、青が6次調査地、赤が7次(本報告)調査地
第3図 周辺地形図 (1/750)

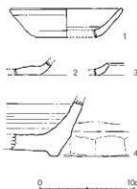


第4図 調査地全体図 (1/125)



- 1 淡黄褐色土 しまりなし
 - 2 黄褐色土
 - 3 赤灰黄褐色土 しまりなし
 - 4 暗灰色土 焼土・土器存在
 - 5 暗褐色土 しまりなし
 - 6 黄褐色土 しまりなし
 - 7 暗黄褐色土 (整地層)
 - 8 暗灰色粘土
 - 9 黄褐色粘質土
- ※2・3は水田層

第5図 基本土層図 (1/40)



第6図 整地層出土遺物
実測図 (1/4)



写真3 基本土層



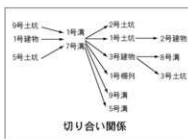
写真4 トレンチ1



写真5 トレンチ2

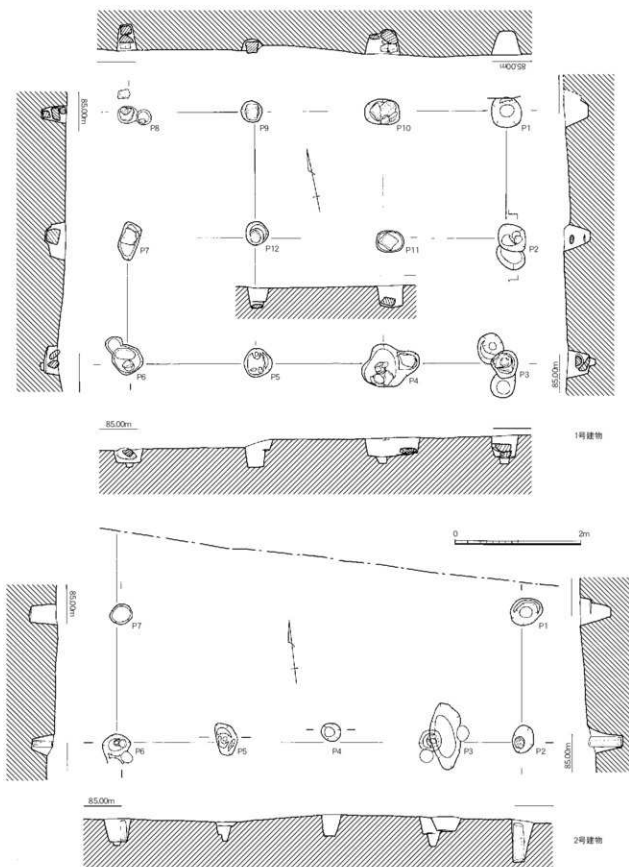
表2 遺構番号対応表

報告番号	調査時番号	報告番号	調査時番号
1号建物P10	P61	2号建物P7	P4
1号建物P10	P62	3号建物P2	P98
1号建物P11	P65	3号建物P3	P100
1号建物P2	P74	3号建物P4	P102
1号建物P4	P117	4号建物P1	P144
1号建物P5	P10	4号建物P2	P138
1号建物P6	P114	4号建物P3	P143
1号建物P7	P53	4号建物P4	P78
2号建物P1	P125	1号溝P1	P85
2号建物P3	P26	1号溝P2	P84
2号建物P5	P25	1号溝P3	P80
2号建物P6	P5	1号建物P1	P71

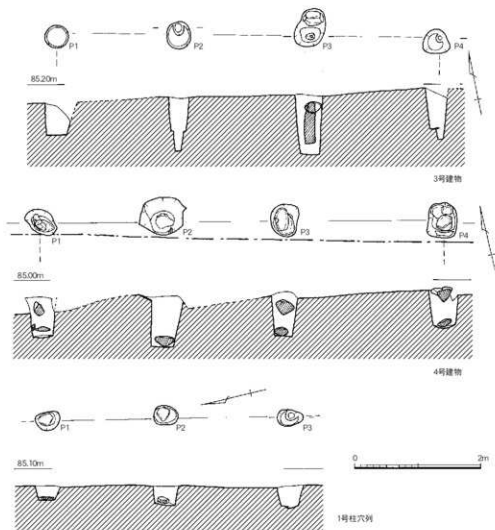


われる。

第5図はトレンチ1の南側壁面の土層である。第1層は現況水田基盤層で、2・3層は旧水田・基盤層である。4～6層は遺物を多く含む包含層で、部分的に焼土などが見られ、褐色を基本とする層でしまりがない。その下層に遺構検出面である整地層の7層上面がある。この整地層下には粘性の強い灰色粘土の8層、その下には黄褐色粘土層の9層が堆積していた。



第7图 1·2号竖立柱建物实测图 (1/60)



第8図 3・4号掘立柱建物・1号柱穴列実測図 (1/60)

石等の存在から全体が不明瞭ではあるが建物として報告している。1号柱穴列に関しては3本のみの柱穴の並びであるため、建物とは認定が困難であるため柱穴列として報告する。

1号掘立柱建物 (第7図、図版2・3)

調査地内中央に位置し、1・7号溝に切られ、東西方向に軸をとる2×3間の総柱の建物である。検出面での柱穴規模は約30～50cmの円形を呈し、いずれも40cm程度の深さを有し、P1を除くほぼ全ての柱穴に裏込めの根石や礎石が据えられていた。梁行方向・桁行方向での柱穴間の距離は約2mを測り、梁行方向の心々距離で約4m、桁行方向の心々距離で約6mを測る。遺物の出土が見られた。

2号掘立柱建物 (第7図、図版3)

調査地西側に位置し、1号土坑を切り、東西方向に軸をとる2+α×4間の建物で、北側桁行方向の柱穴列は未検出である。検出面での柱穴規模は約30～50cmの円形を呈し、深いもので70cm程度の深さを有し、P2・P6に柱木が残存していた。柱木の材質は不明である。梁行方向での柱穴間の距離は約2mを測り、桁行方向での柱穴間の距離は約1.7mを測る。梁行方向は心々距離で約6.4mを測る。遺物の出土が見られた。

3号掘立柱建物 (第8図、図版3)

調査地東側に位置し、3号土坑、8号溝に切られ、東西方向に軸をとる2×3間の建物である。検出面での柱穴規模は約30～50cmの円形を呈し、深いもので90cm程度の深さを有し、P3に柱木(図版7)が残存していた。柱木は面取り加工が施されており、材質は未検査である。桁行方向での柱穴間の距離は約2mを測り、桁行方向

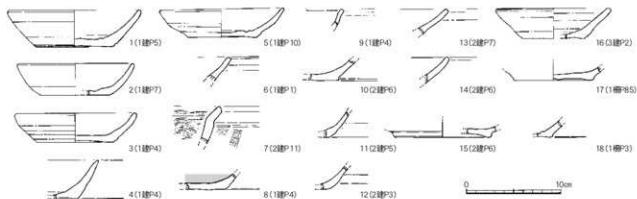
整地層出土遺物(第6図)

1・2は1トレンチ、3は2トレンチ、4は8・9号溝付近の整地層内より出土した。1は土師質土器である。口縁部は直線的に立ち上がる。2も土師質土器の底部である。3は土師質土器の皿である。やや古く12～13世紀前後のものか。4は備前系裏の底部である。そのほか鉄製品が出土しているが、後にまとめて報告する。

(3) 遺構と遺物

1. 掘立柱建物・柱穴列

全部で4棟の建物群が確認されている。このうち1号建物は総柱で全体が検出されているが、2号は南東隅部、3・4号は4列以上の柱穴列と礎



第9図 掘立柱建物・柱穴出土遺物実測図 (1/4) ※P3部はスチヤ

は心々距離で約6mを測る。土師質土器の小破片は出土しているものの、図示できるものはなかった。

4号掘立柱建物 (第8図、図版3)

調査地中央部南端に位置し、東西方向に軸をとる?×3間の建物である。検出面での柱穴規模は約40~60cmの円形・不整形を呈し、深いもので80cm程度の深さを有し、全て根石及び礎石が据えられていた。桁行方向での柱穴間の距離は約2mを測り、P3・4間の距離は2.5mとやや広い。桁行方向は心々距離で約6.5mを測る。遺物の出土が見られた。

1号柱穴列 (第8図、図版4)

調査地中央やや東側に位置し、1号溝を切って、南北方向に軸を取っている。展開が不明であるため柱穴列として紹介する。検出面での柱穴規模は約30~40cmの円形を呈し、30cm程度の深さを有し、P1・P2には礎石が据えられていた。柱穴間の距離は約1.9mを測り、長さは心々距離で約3.9mを測る。遺物の出土が見られた。

出土遺物 (第9図)

1~9は1号建物から出土した。出土柱穴番号は図に記載の通りである。1~6は土師質土器片である。いずれもやや内湾気味に立ち上がる。7は瓦器鉢で、8は灯明皿である。9は青磁碗の破片である。10~15は2号建物から出土した。出土柱穴番号は図に記載の通りである。10~12は土師質土器の底部破片、13・14は口縁部破片で、緩やかに内湾する。15は白磁の底部破片である。16は4号建物P4から出土した土師質土器片である。口縁部は直線的に外に開く。17・18は1号柱穴列P1・3より出土した土師質土器の底部破片である。

2. 溝

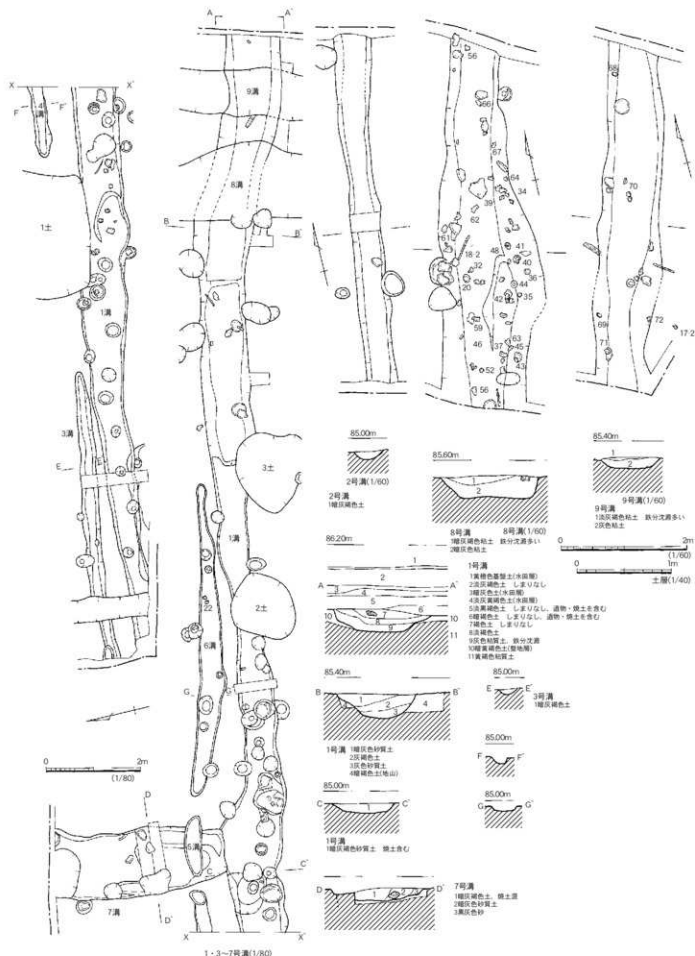
調査地を東西に縦断する1号溝とそれに並走するように並ぶ3~6号溝と南北に縦断する2・7~9号溝に大きく区分される。うち、7号溝は1号溝と明確に切り合いを確認する事が出来ず、埋土も類似することから、同一の溝であった可能性が考えられる。

1号溝 (第10図、図版4)

調査地内を東西に流れる溝である。2・8・9号溝・1~3号土坑・1号柱穴列に切れられ、1号建物・9号土坑を切っている。7号溝と一連の溝である可能性が高く、調査地外に東西方向に伸びている。調査地内での長さ約31m、確認面で最大幅約1.2mを測り、断面形は浅いU字状を呈している。埋土は、いずれもやや粘性のある暗灰褐色土を基本とし、レンズ状に堆積していることから、長期にわたって使用し、次第に埋没したものと予測される。この溝は東から西へと浅くなっており、傾斜状況からも西側へと流れていた事が予測される。また、7号溝との接合部分は明瞭な切り合いは観察されなかった。多数の遺物の出土が見られた。

2号溝 (第10図、図版4)

調査地内を南北に流れる溝である。1・3号溝を切っている。調査地内での長さ約5.5mを測り、確認面での



第10図 溝実測図 (1/40, 60, 80)

最大幅約60cmを測り、断面形は浅いU字状を呈している。埋土はやや粘性のある暗灰褐色土の単一層で、埋没状況は不明である。溝底のレベルに大きな差は見られないため、水流方向は不明である。若干の遺物の出土が見られた。

3号溝 (第10図、図版4)

調査地内を東西に流れる溝である。2号溝に切られている。4～6号溝と幅や深さなども類似していることから、一連の溝であった可能性が高い。長さは約7m、確認面での最大幅約30cmを測り、断面形は浅いU字状を呈する。埋土は暗灰褐色土の単一層であった。溝底のレベルに大きな差は認められないため水流方向は不明である。若干の遺物の出土が見られた。

4号溝 (第10図)

調査地内を東西に流れる溝である。3・5・6号溝と幅や深さなども類似していることから、一連の溝であった可能性が高い。長さは約2.3m、確認面での最大幅約30cmを測り、断面形は浅いU字状を呈する。埋土は暗灰褐色土の単一層であった。溝底のレベルに大きな差は認められないため水流方向は不明である。若干の遺物の出土が見られた。

5号溝 (第10図)

調査地内を東西に流れる溝で、7号溝を切っている。3・4・6号溝と幅や深さなども類似していることから、一連の溝であった可能性が高い。長さは約1.3m、確認面での最大幅約30cmを測り、断面形は浅い台形状を呈する。埋土は暗灰褐色土の単一層であった。溝底のレベルに大きな差は認められないため水流方向は不明である。若干の遺物の出土が見られた。

6号溝 (第10図)

調査地内を東西に流れる溝である。3～5号溝と幅や深さなども類似していることから、一連の溝であった可能性が高い。長さは約6.6m、確認面での最大幅約50cmを測り、断面形は浅い台形状を呈する。埋土は暗灰褐色土の単一層であった。溝底のレベルに大きな差は認められないため水流方向は不明である。若干の遺物の出土が見られた。

7号溝 (第10図、図版4・5)

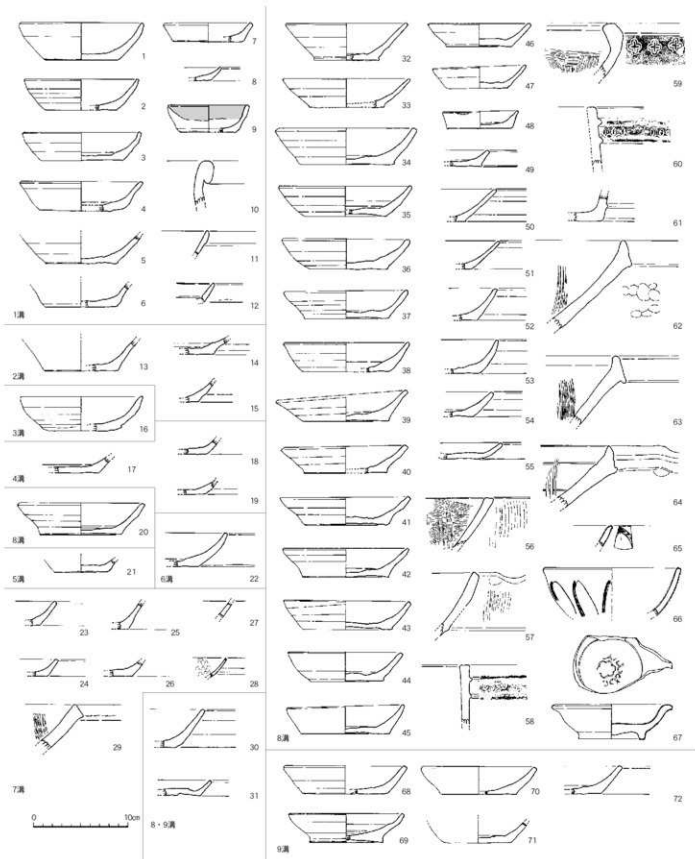
調査地内を南北に流れる溝である。5号溝に切れ、1号建物、5号土坑を切っている。明確な切り合い関係が不明瞭であったことから、1号溝と一連の溝である可能性が高く、調査地外に北側方向に伸びている。調査地内での長さ約3.6m、確認面で最大幅約1.5mを測り、断面形は浅いレンズ状を呈している。埋土は、いずれもやや粘性のある暗灰褐色土を基本とするものの、1層に焼土などが含まれることなどから、最終的には一気に埋没したものと予測される。1号溝との境に段を有して深くなっている。溝底のレベルに大きな差は認められないため水流方向は不明である。若干の遺物の出土が見られた。

8号溝 (第10図、図版5)

調査地内を南北に流れる溝である。1号溝・3号建物を切っており、9号溝と並列している。調査地内での長さ約5.8m、確認面で最大幅約1.6mを測り、断面形は逆台形状を呈している。埋土はやや粘性のある暗灰褐色土を基本とし、レンズ状堆積を示していることから、次第に埋没したものと想定される。南側に向かって低くなっていることから、南側へと流れていたものと考えられる。土器や木器などの多量の遺物の出土が見られた。

9号溝 (第10図、図版5)

調査地内を南北に流れる溝である。1号溝を切っており、8号溝と並列している。調査地内での長さ約5.4m、確認面で最大幅約1mを測り、断面形は浅いレンズ状を呈している。埋土はやや粘性のある淡灰褐色土を基本とし、レンズ状堆積を示していることから、次第に埋没したものと想定される。南側に向かって低くなっているこ



第11図 溝出土遺物実測図(1/4) ※A3部はスス付者

とから、南側へと流れていたものと考えられる。多量の遺物の出土が見られた。

溝出土遺物(第11図、図版7)

溝より出土した遺物をまとめて報告する。なお、木器類や瓦などについては後に説明する。

1～12は1号溝から出土した。1～5は土師質土器環である。うち、1～3は口縁部を内湾させており、4・6は体部がS字上に湾曲し、5は直線的に外に開く。7・8は土師質土器皿か。9は土師質土器皿を転用した灯明皿である。口縁部から体部にかけて煤の付着が著しい。10は備前系の甕の口縁部である。11は肉厚な玉縁口縁の白磁碗である。太宰府分類の白磁碗Ⅳ類(文献1)に相当するもので12世紀頃のものか。12は青磁皿で、口縁部内底面との境に沈線を有する。やや黄色味のある釉であり、同安窯系のものか。

13～15は2号溝から出土した。いずれも土師質土器環で13は体部が直線的に立ち上がる。

16は3号溝から出土した。口縁部は内湾して立ち上がる。

17～19は4号溝から出土した土師質土器環である。内面には溝状ナデが残る。

21は5号溝から出土した土師質土器環と皿である。口縁部は直線的に外に開く。

22は6号溝から出土した土師質土器環である。口縁部は内湾する。

23～29は7号溝から出土した。23・24は土師質土器皿である。25・26は土師質土器環か。27は青磁碗で内面に二重の沈線文が巡る。28は白磁碗である。内面に鱗状の文様が見られる。29は陶器挿鉢である。備前系か。

30・31は8・9号溝に設定したトレンチより出土した。口縁部の土師質土器環である。口縁部は直線的に立ち上がる。31は土師質土器皿で口縁部は小さく立ち上がる。

20・32～67は8号溝から出土した。20・32～45・50～53は土師質土器環である。32・33・50～52は口縁部が直線的に外に開きやや長く、34～38・53はやや口縁部が内湾する。20・39～45はやや内湾気味ではあるが、口縁部が直線的に立ち上がるものである。46～49・54は土師質土器皿である。46・47は口縁部が直線的に開き、48・49は口縁部が直線的に立ち上がる。55は土師質土器皿で口縁部が大きく開く。その他のものとかかなり特徴が異なっている。56は瓦器挿鉢である。57は瓦器鉢である。58～60は瓦器火鉢である。58は口縁部外面下部に2条の突帯が巡り、その間外面に花文がスタンプされる。59は瓦器火鉢でも浅鉢のもので、口縁部外面にスタンプ文が巡る。59は口縁部外面下部に2条の突帯が巡り、その間にスタンプ文が付される。61は瓦器火鉢の底部か。62～64は陶器挿鉢の口縁部である。備前系と思われる。口縁部がたち上がり、外面部平坦になる。間壁編年の備前焼Ⅳ期(文献2)に該当するものか。65は片影蓮弁文の青磁碗である。上田編年のB-I類(文献3)に該当するものか。66は片影及び細線文による蓮弁文の青磁碗である。上田編年のB-II類(文献3)に該当するものか。67は青磁環で口縁部は外反する。底部内面見込みには幾何学花文が印にて施される。

68～71は9号溝から出土した。いずれも土師質土器環で、口縁部はやや直線的に外に広がる。

3. 土坑

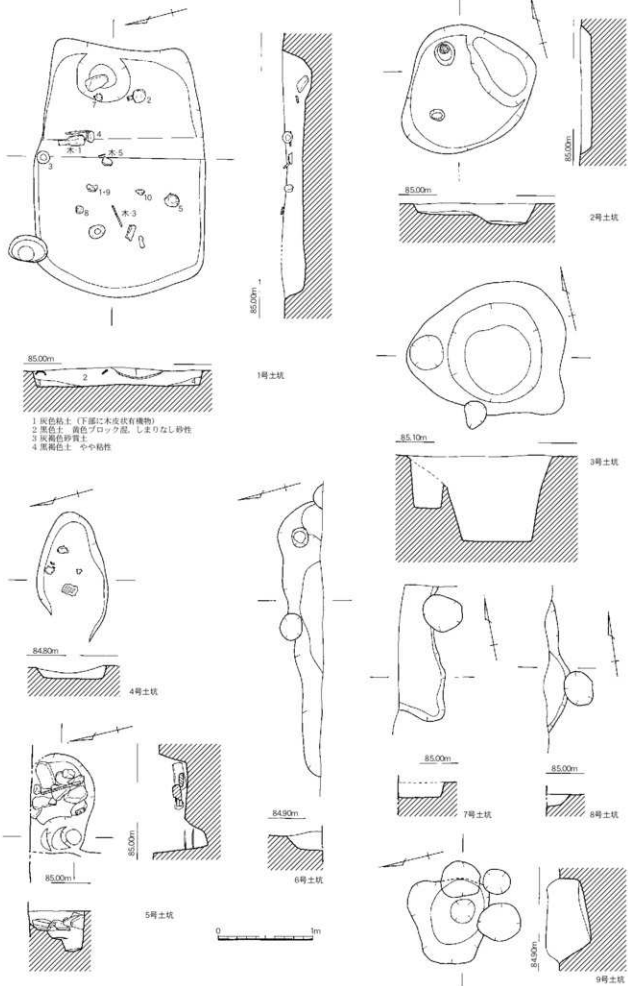
全部で9基が確認された。うち6～8号土坑は全体が不明であるため土坑として報告する。また3号土坑はその形態から、井戸の可能性が考えられるが、機能の限定は避け、ここでは土坑として報告する。

1号土坑 (第12図、図版5・6)

調査地中央よりやや西側から出土した土坑で、1号溝を切り、2号建物に切られている。確認面での規模は長さ約2.7m、幅約1.8m、深さ約20cmを測り、不整形を呈している。埋土は3・4層が使用時の自然堆積層と思われる。2層は黒色でブロックを含み粘性が低いことから使用後に一気に埋没したものと思われる。土坑内には完形の環などが廃棄されており、また木製の杓子や箸なども見られた。出土状況は一ヶ所に集中していないことなどから、廃棄によるものと想定される。

2号土坑 (第12図、図版6)

調査地中央よりやや東側から出土した土坑で、1号溝を切っている。確認面での規模は径約1.5m程度、深さは約15cmを測り、不整形を呈している。東側に一段下がっており、北側には柱木が残存していた小ピットが確認された。遺物は土師質土器などが見られた。



第 12 図 土坑実測図 (1/40)

3号土坑 (第12図、図版6)

調査地中央よりやや東側から出土した土坑で、3号建物、1号土坑を切っている。確認面での規模は約1.4～1.7m、深さは約90cmを測り、不整形形を呈している。断面は逆台形状を呈しており底面はほぼ平坦である。井戸状の形態を呈しているものの、深さがやや浅いことから土坑として報告する。ただし、現状でも粘土層の下面の湧水層まで掘りこまれていたため、自然に水は溜まる状況であった。遺構上面の埋土(図版6-⑥)には礫が多数含まれており、埋め灰されたものと想定される。遺物は土師質土器などが見られた。

4号土坑 (第12図)

調査地中央より西側にて検出された土坑で、1号溝に切られている。確認面での規模は長さ約1.4m、幅約75cm、深さは約15cmを測り、楕円形を呈している。遺物は少量の土師質土器などが見られた。

5号土坑 (第12図)

調査地中央北側にて検出された土坑で、7号溝に切られており、調査地外に広がっている。確認面での規模は長さ約1m、幅約60+αcm、深さは約30cmを測り、楕円形を呈している。土坑下面には礫が敷き詰められており、或はピットの礎石であった可能性もある。遺物は土器小破片が出土したものの、図示できるものはなかった。

6号土坑 (第12図)

調査地中央北側にて検出された土坑で、1号溝に切られ、調査地外に広がっている。確認面での規模は長さ約2.9m、幅約45cm、深さは約20cmを測り、不整形形を呈している。遺物は土器小破片が出土したものの、図示できるものは見られなかった。

7号土坑 (第12図)

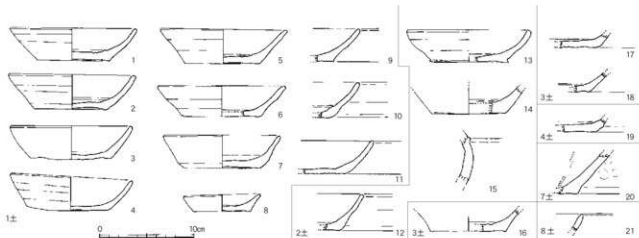
調査地西隅にて検出された土坑で、調査地外に広がっている。確認面での規模は長さ約1.4m、幅約50cm、深さは約15cmを測り、不整形形を呈している。遺物は土器片が出土した。

8号土坑 (第12図)

調査地西隅にて検出された土坑で、調査地外に広がっている。確認面での規模は長さ約1.4m、幅約20cm、深さは約15cmを測り、不整形形を呈している。遺物は土器片が出土した。

9号土坑 (第12図、図版6)

調査地中央にて検出された土坑で、1号溝に切られている。確認面での規模は長さ約1.4m、幅約50cm、深さは約50cmを測り、不整形形を呈している。遺物は土器小破片が出土したものの、図示できるものは瓦のみであった。



第13図 土坑出土遺物実測図(1/4)

土坑出土遺物 (第13図)

土坑から出土した遺物をまとめて報告する。なお、木器類や瓦類などは5.その他の遺物でまとめて報告する。

1～11は1号土坑から出土した土師質土器である。1～7・9～11は坏である。1・2・9は口縁部がやや内湾している杯である。3～7は口縁部が直線的に開く坏で、7は底部が明瞭に作出されない。8は皿で口縁部は直線的に外に開く。

12～15は2号土坑から出土した。12～14は土師質土器坏で、12・13はやや口縁部がやや内湾する特徴を有する。15は瓦器の釜か。

16～18は3号土坑から出土した土師質土器坏である。16は口縁部が直線的に開くタイプのものか。

19は4号土坑から出土した土師質土器坏の破片である。

20は7号土坑から出土した瓦器揃鉢か。

21は8号土坑から出土した土師質土器坏の破片である。

4. ビット

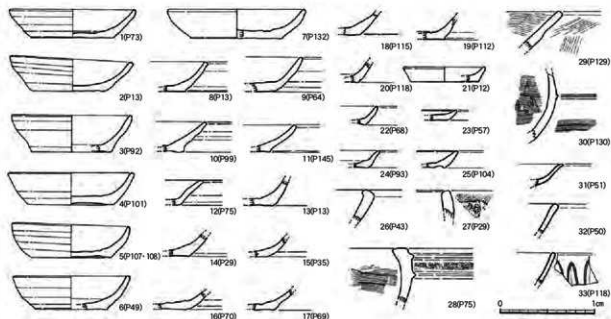
ビットは調査地内に満遍なく広がって検出されたものの、7号溝から東側にかけて密度が薄くなるようである。これは、6次調査地においても西側にかけて次第に密度が薄くなる点と一致している。当初は1・3号建物や1号溝などが作られていたが、8・9号溝の区画が作られてから、この一体の建物建設利用等の動きは緩慢となったものと想定される。

また、柱木が確認された柱穴の大半は掘立柱建物を復元できた。しかし、一部建物の想定が出来ない柱木の残るビットも見られ、さらに多数の掘立柱建物が展開する可能性は高い。今回は調査面積の問題等から復元可能な範囲に留めている。

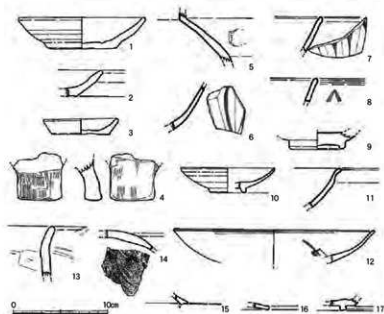
ビット出土遺物 (第14図)

ここではビットより出土した遺物で図示可能なものをまとめて紹介する。器種別に分けて紹介し、出土遺構は観察表及び図の番号を参照いただきたい。

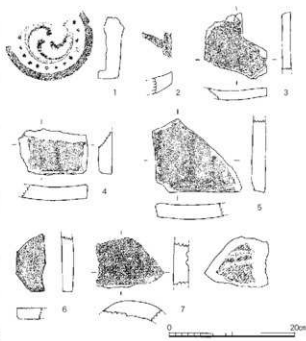
1～20は土師質土器坏である。1～9・11は口縁部がやや内湾気味に立ち上がるもので、10は直線的に広がる。13～20は底部の破片で、その他の坏に類似するものか。21～25は土師質土器皿である。21・22・24は口縁部が直線的に立ち上がる。23・25は口縁部が外に開くもので、やや古い様相を呈する。26は瓦器の鉢、27は瓦器火鉢である。口縁部直下に花文がスタンプされる。28は瓦器火鉢で口縁部直下に突帯が2条廻り、突帯間に



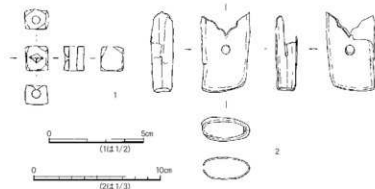
第14図 ビット出土遺物実測図 (1/4)



第15図 その他の土器実測図 (1/4)



第16図 出土瓦実測図 (1/6)



第17図 出土金属器実測図 (1/2, 1/3)

5. その他の遺物 (第15～18図)

ここでは、調査地内の表土等から出土した遺物や木器・瓦・鉄器などをまとめて紹介する。

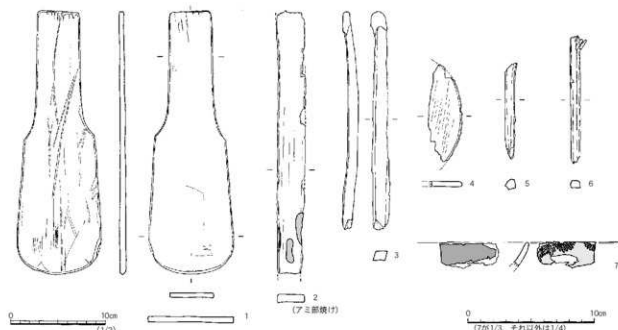
土器 (第15図)

第15図1・2は調査地内の遺構検出面において出土した土師質土器坏で口縁部は直線的に外に開く。

3～12は調査地内の表土等から出土した遺物である。3は土師質土器皿で口縁部が立ち上がる。4は瓦器火鉢の脚部か。5は龍泉窯系青磁の四耳壺か。耳部が一部残存する。6・7は龍泉窯系青磁碗である。外面に鈎連弁文が明瞭に残る。太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類b(文献1)に該当する。8は龍泉窯系青磁碗である。外面にやや甘い片形蓮弁文が残り、口縁部は小さく外に開く。太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2C類(文献1)に該当する。9は青磁碗の底部で底部はややシャープに作り出す。10は白磁の小型高台付皿である。口縁部は緩やかに内湾しており、森田編年B類(文献4)に該当する。11は白磁碗である。口縁部が外に反する。森田編年C類(文献4)に該当するものか。12は染付の皿である。口縁端部が反る形態で、内外共に口縁部に一条の界線が走り、内面に模様は巡る。

13～17は各遺構から出土した古代の遺物である。明らかに流れ込みと思われるためここでまとめて紹介する。なお、出土遺構は観察表を参照いただきたい。13は土師器甕である。口縁部が小さく立ち上がる。14～16は須

スタンプ文が施される。29は瓦器鉢である。30は瓦器釜の類か。外面に突帯が走り、破砕後に外面に煤が付着する。火災等の影響か。31は白磁の皿である。口縁部はS字状に緩やかに湾曲する。森田編年E・2類(文献4)に該当するものか。32は龍泉窯系青磁碗である。口縁端部がやや肥厚する。33は龍泉窯系青磁碗である。外面に片形蓮弁文が施されるものの縁は緩い。上田編年BⅡ類(文献3)に該当する。



第18図 出土木器実測図 (1/2, 1/3)

恵器环蓋である。14には内面にヘラ記号が施される。15は口縁端部が嘴状を呈し、16は端部が丸みを帯びている。17は須恵器椀の底部で、高台が残る。

瓦 (第16図、図版7)

各遺構から出土した瓦をまとめて紹介する。出土遺構は観察表を参照いただきたい。

1は軒丸瓦である。内外共にナデ仕上げで、瓦当面に巴文が施される。外面に被熱による煤が付着しており、火事等の痕跡を示すものか。2～6は平瓦である。2の凹面にはコピキAが見られ、3の凹面には目が見られる他は内外共にナデ仕上げである。また、6の凸面の一部には1と同様に煤が付着している。7は丸瓦で調整は凹面にはコピキAが見られ、外面には縄目タタキが認められる。また、吊紐痕も認められる。

金属器 (第17図、図版7)

1は整地層確認用トレンチから出土した金属製品である。鉄製鋳造の用途不明製品である。正立方体を呈し各角は面取りされている。正面上部に四角錐状の凹みがあり、中央部に直径1mm以下の孔が穿たれている。この孔は側面に大きくあけられている直径4～5mmの穴に貫通してつながっている。2は9号溝の東側整地層上面から出土した青銅製の刀装で、鞘尻(石突)ないし兜金(把頭)と推測される。青銅を折金で成形し、側面部を付き合わせ、底面は蓋をするようにつなぎあわせている。端部は花状の装飾が施され、中央部には穴があけられている。南北朝時代の作とされる春日大社歳の変作打刀や阿蘇神社旧歳の牡丹造腰刀などの拵えに類似しているところから、少なくとも南北朝時代以降のものとしてよかろう。(文献⑤)

木製品 (第18図、図版7)

各遺構から出土した木製品をまとめて報告する。ただし、材質については未調査である。1は1号土坑から出土した杓文字である。内外共に丁寧に削り出されており、先端部は使用による摩滅が見受けられる。2は8号溝から出土した板状木製品である。細長い板状のもので、下端部に焼けた跡が認められる。3は1号土坑から出土したヘラ状の木で、両端をカットしたまま未調整である。先端部には焼けた跡が認められる。籌木の可能性が考えられる。4はP138から出土した桶の底である。大半が失われている。5は1号土坑から出土した箸の破片か。全体に焼けた跡が認められる。6は1号建物P3から出土した箸である。7はP12から出土した漆器椀である。内面は赤漆が施され、外面は黒漆地に菊花文が施される。

IV まとめ

さて本章では、前章までにおいて解説を加えた遺構や遺物の時期を整理し、遺構の性格について検討を加えることにするが、対象となると考えられる市内における14～16世紀の土器編年はいまだ不明瞭な点が多いため、詳細な時期比定が困難となっている。特に遺物の大半を占める土師質土器については不明な点が多く、時期決定の多くは14世紀までの整理が充実している太宰府の状況や出土量が少なく破片資料の多い陶磁器類に頼っている状況である。しかし近年、当該時期の遺跡調査が増加しており、資料が蓄積されつつある。そこで、これらの資料を用いて、土師質土器の変遷について整理し傾向の抽出を試みたい。これにより、遺構の大半を占める出土土師質土器を用いて、概ねの遺構の変遷を捉え、慈眼山遺跡を評価する手がかりとしたい。

(1) 日田市内出土の14～16世紀の土師質土器の変遷と年代

まず、市内における14～16世紀の土師質土器の変遷を整理するにあたり、これまでの研究成果を整理する。日田市内の当該時期の土師質土器編年の最も古いものとして、田中氏によって2次調査の報告時に遺構の層位関係を軸に15世紀後半～16世紀前半の編年が試みられている(田中1991)。基本的には色調に基づく分類ではあるものの、器形や法量・調整とも合致し、体部の内湾する淡褐色系の環(B1類)が、やや内湾気味ではあるものの体部が直線的になる過渡的形態の環(B2類)を伴いながら、器内が薄く体部が直線的に伸びて口径に対して底径の小さな淡褐色系の環(C類)へと変化すると捉えている。そして、共存遺物の存在などから概ね15世紀後半から16世紀前半に該当するものと想定している。このような想定に対し、4次調査の報告などにおいて、行時氏が12～16世紀までの市内の遺跡出土資料を用いて編年観の整理(行時2000・2001)を試みている。うち、15～16世紀に関しては、主に環の形態変化と調整の変化に着目し、C類は調整が丁寧で器形のバランスが良く、B類はつくりが雑な点が特徴として考えられるとして、C類からB類への変化を想定し、C類を概ね15世紀後半、B類を16世紀前半と田中氏とは逆の傾向を提示している。両者は変化の方向性については大きな相違があるものの、収まる大枠の時期や分類についてはほぼ合致しているため、余計に混乱をきたしており、その後発表された各報告においては概ねの所属時期はこれらの案を踏襲するものの、詳細な時期比定は避けている状況と言える。また、14世紀後半から15世紀後半については、上井手遺跡において若杉氏が特徴を抽出するものの、その変化傾向までは踏み込んではいない。(若杉2007)

さてこのように、各遺構から出土した遺構毎に特徴は語られるものの、全体を通した傾向は抽出されておらず、またそれぞれの時期比定や変化傾向に混乱が生じている状況が一部見られるようである。その問題点としては、①対象遺物の一括性の検討がなされていない場合がある②分類基準が器形・調整・法量・色調のうちどれに重きをおくかで異なっていると共に、それらの分類属性が明確に峻別可能なものではないため、相互の意図する分類基準の理解が混乱している③各分類は同一系譜上で変化するものと捉えている④変化の方向性の決定根拠が、層位等と精粗差のどちらに重きをおくかで異なっているといった点が挙げられる。

本来であればこれらの問題点をクリアする器種設定と分類基準を作成し、属性毎の傾向を数値化した整理が望ましいと思われるが、技法上の微細な変化を属性として抽出するかどうかの判断が難しいうえ、比較的一括性が高いと判定する一定量の遺物が出土している遺構を対象とした場合、変化方向を明確に証明する層位関係を有する資料やクロスチェックの対象と出来る広域土器を有する資料は思ったほど多くはないという現実がある。そこで今回の手法としては、器種分類は行わず、近年14～16世紀の整理が進んでいる豊後や筑前地域などにおける土師質土器編年を参考としつつ、一括性が比較的高いと思われる遺物毎に切り合い関係などを重視しながら変化方向を概観することとする。そのうえで、陶磁器等の広域分布土器や年代比定の可能な遺構を利用して、概ねの年代観を提示することに留めたい。

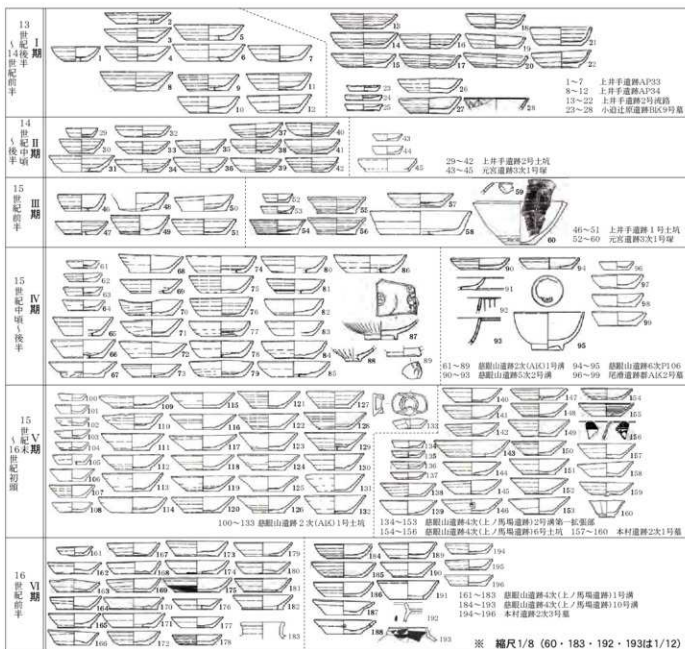
さて、上記方針に従いまとめたのが第19図の素案である。概ね6箇所の一括資料と類似資料を用いて区分した。I期には、年代比定可能な資料を有する遺構が見られないものの、一括性の高い標識資料として埋納遺構である上井手遺跡AP33・34の1～2を想定した。切り合い関係からAP33が古く、AP34が新しい。環のなかにも1のやや小型、2～4の直線的に口縁部が外に開くもの、5・6・8・9の口縁部が直線的に開くものやや深型のもの、10～12の深

型でやや内湾気味なものなど複数のタイプが見られる。法量^mでは1が口径10.4・底径4.8・器高3.1cmで、それ以外は平均値で口径14・底径8.7・器高3.5cmを測るやや大型の部類である。ただし、AP34の方が若干小型であるため、この型では新しくなるにつれて小型化する可能性が考えられる。また、これらの器形に類似するものを持つ類例としてやや一括性は劣るものの、上井手遺跡3次2号流路一括埋納遺物13～22が挙げられる。10～12のように若干内湾気味の環13～15などが見られる一方で、体部下端に丸みを残して湾曲して立ち上がる器形の異なる一群16～22が伴っている。前者が口径13.9・底径8.9・器高3.2cmとAP33・34例とほぼ同数値であるのに対し、後者は口径12.8・底径8.3・器高3.3cmと径が小さい。後者の一群が前川(1978)Ⅱ-3～4期(13世紀)、坪根・塩地(2001)の13-1期に類似する器形であることから、やや古い時期の一群と捉えておきたい。そのほか小迫辻原遺跡B区9号墓23～28の環26・27も上井手AP34例と類似していることなどから、ほぼ同時期と考えられよう。ただし、23～25の小皿は伴うものの、28の青磁碗(大宰府分類Ⅱ-b類)は棺外副葬等の流れ込みとの報告のため、共存性は低いと判断した。以上のような特徴を他地域と照らし合せ、1期を概ね13世紀後半から14世紀前半の間に置くが、検証可能な遺物が乏しいため、明確な時期比定は出来ない。なにより、今回の主眼はあくまで14～16世紀の変遷であるため、ここではその前段階の傾向を述べるに留めることとしたい。いずれにしても1期の中では上井手3次2号流路が比較的古く、それに上井手AP33、AP34の順番で続き、小迫辻原例はAP33・34と同時期と捉えておきたい。

続く時期のⅡ期には、上井手遺跡2号土坑を想定した。Ⅰ期で見られたやや小型の30や口径縁部が直線的に広がる31のタイプが見られると共に、深型の小皿29や体部が外に開くものの内湾して立ち上がる一群33～42が多く伴うようになる。また、31が口径14・底径8.2・器高3.5cmと前時期とあまり変わらないのに対し、33～42の一群は口径11.4・底径6.9・器高3cmと大幅に小型化していることが特徴と言える。Ⅰ期のAP33⇒34の傾向もやや小型化を示していたことを考えると、小型化し、内湾気味の器形が増えると想定される。さて、このような特徴に該当するものとして元宮3次1号塚出土遺物が挙げられる。44は29と類似し、45も口径縁部内湾の一群と想定される。この元宮3次1号塚には笠塔婆が建てられており、後者の紀年銘ではあるが観應元年(1350)と刻まれている。確実な共存を示すものではないものの、一定の年代観を提示する資料と評価できるであろう。このことから、Ⅱ期は14世紀中頃～後半頃と捉えておく。

次のⅢ期には上井手遺跡1号土坑を想定した。Ⅱ期で見られた体部が外に開くものの内湾して立ち上がる46に、Ⅱ期の30のような器形がさらに深型化して体部が上方に立ち上がるタイプ47～49が伴うようになる。また、あまり深型ではないが体部が上方に立ち上がる50・51の一群も伴う。46は口径11.2・底径6.6・器高2.9cmとⅡ期と大きく変わらないが、47～49は大きさが異なるものの、口径が9.6～12.4の間で器高は3.6～4.6とかなり深型である。50・51でも口径13.3・底径9.4・器高3.5cmと底径が広がっていることを示している。また、Ⅱ期までにはさほど見られなかった特徴が調整において見られ、内底面にヘラ状工具による輪状の痕跡が観察されるものが増加する。さて、このような特徴に該当するものとして、一括性は低いものの上井手遺跡2号溝が想定される。体部が直線的に上方に立ち上がる1・2の小皿と共に、口径縁部が直線的に上方に立ち上がる54～56の一群が伴う。そのほか57の直線的に体部が外に開くものと体部が上方に立ち上がる大型環の58、59の片形り蓮弁の青磁碗及び60の備前系挿鉢が伴う。このうち60の備前系挿鉢は開塚分類の15世紀のⅣ期(1990)でもやや古い時期と想定される。従ってⅢ期は15世紀前半に比定されるものか。

続くⅣ期は慈眼山遺跡(2次)A区溝埋土下層の遺物を想定する。下層出土とは言うものの、溝の出土であるためやや一括性は劣る。61～64の体部が上方に立ち上がる小皿の一群や65・66のように深型で体部が上方に立ち上がる一群が見られ、Ⅲ期との連続性が認められる。また、前時期に見られた57に類似する体部が直線的に外に開く一群67～73と50・51に類似する深型で体部が内湾気味に上方に立ち上がる一群74～79が増加する。前者は口径13.2・底径8・器高3.2cmを測り、後者は口径13.4・底径8.5・器高3.5cmと底部が広くやや深型である。そのほか体部が広がって内湾する一群には80～83のやや小型(口径12.6・底径7.6・器高3.3cm)と84～86の大型(口径14.5・底径9・器高3.6cm)の2種類が見られる。調整はⅢ期と同じように内底面にヘラ状工具による渦状ナデ痕跡が観察されるものが半数以上を占めている。これらの土師質土器には上田分類のB-Ⅳ類に相当する87～89の龍泉窯系青磁碗が伴っており、15世紀後半以降と想定されよう。さて、このような特徴に該当するものとして慈眼山遺跡5次2号溝、慈眼山遺跡6次P106が挙げられる。



第19図 土師質土器の変遷素案

90・91・94は体部が広がり内湾する小型の一群に該当するもので、他には92の細撞連弁文で剣先が意識されていないものや93・95の無文で体部が丸みを帯びる青磁碗が伴っており、87～89の青磁とほぼ同時期と見てよいだろう。そのほか体部が広がり内湾気味の坏と類似する特徴を有するもので尾漕遺跡群A区2号墓出土の坏が挙げられる。この2号墓に副葬された六道銭の中には朝鮮通寶（1423年鑄造）が含まれており、入手の期間等も加味すると15世紀中頃の埋葬年代が想定される。以上の点から、IV期は15世紀中頃～後半と比定する。

V期には慈眼山遺跡（2次）A区1号土坑を想定した。浅い土坑に一括廃棄された可能性が高く、層的にもIV期の標識遺構より後出することは確実である。小皿35～44はIV期に類似しつつも、体部がやや外に開くものが多く見られる。杯はIV期に続き浅く体部が直線的に外に開く一群109～113が見られるが、開き方がやや大きいようで、口径13.1・底径7.2・器高3cmと底径がやや小さい。また、口径が大きく深型の114も同様に見られる。しかし、なにより特徴的なのは、115～132の底部が狭く、器内の薄い体部が直線的に伸びて外に開く一群が見られることで、これらは115～120のやや浅いタイプ（口径13.1・底径7・器高3.2cm）と121～132の深いタイプ（口径12.6・底径6.7・器高3.4cm）に分かれるようである。色調も橙色系が少ない上に器内も薄く、また、調整もIV期までに顕著に見られた内底面の渦状ナデが殆

ど見られない。そのため、明らかにこれまでの土師質土器とは系譜の異なるものと想定され、豊後や博多でも顕著に認められる所謂大内系土器の影響によって出現する一群と捉えて差し支えないものであろう。日田氏が大友姓であった時期とも凡そ合致することから考えても、大きな影響を受けていた可能性は高いと考えられる。そのほか、このような特徴に該当するものとして一括廃棄と想定される上ノ馬場遺跡(4次)2号溝第1拡張部出土の一群134~153が合致し、また同6号土坑からは口縁部端反で、外面には牡丹唐草文や蔓唐草文、内面には四方禪文が施された小田分類(1982)碗B群に該当する明青花156が伴っている。また同様に、本村遺跡2次1号墓出土資料の157~159は形態的に類似しており、160の森田分類(1982)D類に該当する多角坏が伴っている。以上のように、共存する青花や白磁では15世紀代と捉えられるものの、豊後での編年を考慮すると15世紀でも未頃で、次の土器群との関係を考慮して16世紀初頭頃と比較的短期間を想定しておきたい。

VI期には上ノ馬場遺跡(4次)1号溝を想定した。一括性はやや低いものの層位的にはV期の2号溝第1拡張部に後出する。161の小皿に162~166のやや小型の坏が伴い、口縁部が内湾気味に立ち上がる167~171の坏が見られる。また、体部が直線的に開くものの底部は広く、口縁がやや内湾する73~75・79~82の一群(口径12.8・底径8.6・器高3cm)と小型の76~78の一群(口径10.6・底径6.3・器高2.5cm)が見られ、V期の影響を受けたと想定される器形は呈しているものの、IV期の器形や調整にも類似し、内底面にヘラ状工具による渦状ナデ痕跡が観察されるものが増加する。複数のタイプが見られ、調整も異なることから、大内系土器の影響が在土器製作に反映され成立したものと想定したい。また、これらの土器には間壁分類(1990)V期の壺が伴っている。同様な特徴を有するものには上ノ馬場遺跡(4次)10号溝184~191があり、やはり多様なタイプが出土し、口縁部に明瞭に平坦面を作り出す間壁分類(1990)IV期後半~V期の挿鉢が伴っている。また、本村遺跡2次3号墓94~96はV期の1号墓を切っている。以上の点から、VI期は16世紀代と考えられるが、染付類が全く認められないことから、全国的に流通し大量消費される中頃以前の前半期と見ておきたい。近隣の玖珠町伐株山城跡では、染付類は16世紀中頃前後から主体となっている点を考慮しても妥当と思われよう。

以上のように概ね6時期に分類してその特徴を述べた。その傾向については、大まかにはサイズの縮小化や器形の変化、バリエーションの増加や調整の変化などが指摘できるが、全体的にほぼ同一の変化傾向を示しているわけではないようである。従って、今回把握出来た傾向としては、V期などに特徴的なように、あるタイプが増加もしくは出現するとされた相対的な状況で理解されるものと考えておきたい。

(2) 7次調査の遺構の時期

さて、前項の土器変遷素案をもとに、本調査の遺構時期を比定する。まず、切り合いからも最も古いと想定される1号掘立柱建物の土器はIV期に該当するものと思われる。第9図9の口縁端反りの青磁碗はやや古いものか。次に切合から1・7号溝が続き、土器の特徴もやはりIV期に該当する。1号建物と1・7号溝の土師質土器に大きな違いが見られないため、時間差はあまりないものか。備前焼IV期の口縁端を折り曲げた玉縁口縁を持つ第9図10の裏や口縁端部に平坦面を作出する第9図29の挿鉢の存在からも、やはりIV期でもやや古い時期を想定しておきたい。また、2号土坑もさほど差のないIV期と想定され、1号溝と並走し、一部7号溝を切る3~6号溝も、内湾気味の坏の特徴からIV期に該当するものと想定する。

3号土坑、3号建物は土師質土器の特徴からV期に相当するものと思われる。次に、土師質土器ではVI期の特徴を持つ8号溝が挙げられる。ただし、第11図32・50・51は明らかにV期の特徴を有しており、また共存する62~64の備前系挿鉢は間壁編年のIV期後半頃に見られる特徴を有している。66の青磁碗は蓮弁が繋がっておらず、小野編年(1982)青磁蓮弁文碗B群に該当するもので14世紀末~15世紀後半のものか。太宰府分類Ⅲ類よりかなりあつぽたく退化した印象を受ける67の青磁坏は、ほぼ同時期のものと思われる。以上の点を考慮して、8号溝は概ねIV期15世紀末頃~V期の16世紀前半に当てはまるものと考えておきたい。

9号溝はその特徴からVI期に該当するものか。同様に切り合い関係上新しい2号建物・1号柱穴列・1号土坑は土器の特徴からVI期に該当するものと捉えたい。以上の検討から、概ね本遺跡の該当時期は15世紀中頃~16世紀前半に

かけての短期間の内に、大きく前半（Ⅳ期）と後半（Ⅴ期）に分かれて時期を違えながら変遷したものと想定される。ただし、一部13～14世紀代の可能性もある土師質土器小皿の破片なども見られる点も注意が必要である。

(3) 慈眼山遺跡の特徴と評価

さて、本遺跡の調査を通して、過去の調査の整理を試みたい。1・3次調査の時期は概報のため不明であるが、おおむね13～16世紀中頃までのL字状に曲がる溝跡や井戸などが確認され、町割造成の可能性が指摘されている。2次調査では道路の側溝と推測されるⅣ期の石組溝、Ⅳ～Ⅴ期にかけての整地層とその整地層に掘り込むⅤ期の土坑などが検出されている。4次調査ではⅤ期の溝や土坑・井戸が検出され、Ⅵ期まで継続して使用されている。5次調査ではⅣ期の溝や井戸・建物跡、Ⅵ期の溝等が見られ、遺構の上にⅥ期の焼土が入る整地層（包含層）が確認される。6次調査ではⅣ期・Ⅴ期の柱穴やⅥ期の土坑（井戸か）などが確認される。さて、以上のように概ねⅣ～Ⅵ期の遺構が展開していることは明らかであるが、全体を通して注目される点としては、①5～7次調査ではⅣ～Ⅵ期の遺構形成前に大規模な整地が行われている②どの調査においても13～14世紀代と思われる遺物が混入していること③2・5次調査ではⅣ期以降に再度整地が行われていること④かなり広範囲に方位に合わせた町割が行われていること⑤調査区のみならず最も南側の4次調査ではⅤ期以降の遺構しか確認出来ておらず、町割りや造成が徐々に南側に広がっていった可能性があることなどが特徴として挙げられる。

このうち、①の整地層からは第6図1のⅡ期や3のⅠ期と見られる環・小皿が出土しており、また同様に6次調査においてもⅡ期頃の可能性がある小皿が出土している。全体的にⅢ期の遺構も殆どなく、②の点も考慮すると、この整地はⅢ期にかけて実施されたものと思われ、その際にⅠ～Ⅱ期の遺構が削平された可能性が考えられよう。次に③の整地の可能性もある点は6次調査においても層位的に確認されており、Ⅳ～Ⅵ期にかけて複数回実施されたものと予測される。

さて、以上のような状況が全体的に確認されるが、日田市史及び九州天領の研究（橋本1987、川添1976、木村1976）などを参考にこの時期の社会背景について触れておこう。大蔵姓日田氏の時代では13世紀頃から御家人として活躍しその領土を安堵されると共に、元寇の際には恩賞も得て支配範囲を広げており、地頭職としての地位を確立している。14世紀末には南北朝の動乱を経て、守護大名である大友氏の支配下とはなるものの、有力国人として将軍家直轄軍（奉公衆）に採用されており、在地領主としての相当の独自性を有していたものと想定される。この大蔵姓日田氏も1444年には家督争いの激化により大蔵永包が殺害されたことでその血脈が途絶えることになるが、守護大友氏より養子を取る事で日田氏を維持する事となり、大友姓日田氏が成立する。この後の戦国時代の間は、大友姓を有するもの大友氏の直接支配下におかれたわけではなく、依然として豊後の大国人領主であることには変わりなかった。この大友姓日田氏も15世紀後半～16世紀前半にかけて大友氏に謀反を起こそうとしたり、大友氏の内乱に積極的に関わるなど、かなり危険な存在となっていたため、1548年には再度謀反の疑い及び郡士の反発によって、大友義興の命で討伐され、日田氏が断絶することになる。16世紀後半以降は日田郡士が八群老となって治め、大友氏の支配下におかれると共に、大友氏豊後除国によって天領となるまで織豊期の動乱に飲み込まれていく事になるのである。

このような背景と調査成果を照らし合わせた想定を最後にまとめると、慈眼山遺跡は、慈眼山頂に作られた大蔵古城の城下として、それ以前の町割を壊して整備されたものと想定される。これは将軍直轄軍として確固たる地位を築いた15世紀前後頃から大友姓日田氏の成立に至る15世紀中頃にかけて一斉に行われたものと思われる。現在の小字でも郡士の屋敷地名が残る、調査で瓦や刀、刀装具などが出土している点からも武家屋敷が広がっていたことは間違いないだろう。そして遺跡のメインとなる15世紀後半～16世紀前半の大友姓日田氏の時代にかけて、その町割りを南へと広げながらも度々整地などを繰り返して街区整備が続けられていたものと想定され、本調査例でも見られた火災を受けた可能性のある瓦や大量の焼土が混入された5次の整地層の存在等はこの間の謀反や内乱に関わった結果を示すものかも知れない。いずれにしても、16世紀後半からの遺構が全く見られないことを考えると日田氏断絶以後はこの城下の機能が停止した可能性が高いとまとめることが出来る。



調査地遠景（慈眼山を望む）



調査地全景（真上から）



① 1号建物P3



② 1号建物P4



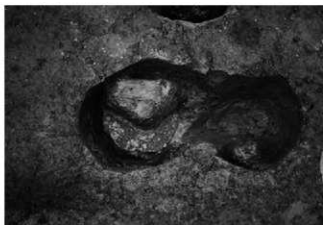
③ 1号建物P5



④ 1号建物P6



⑤ 1号建物P7



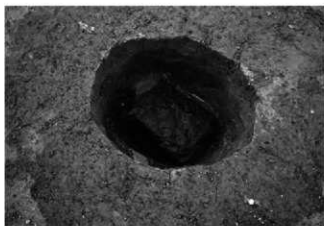
⑥ 1号建物P8



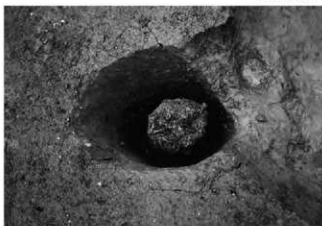
⑦ 1号建物P9



⑧ 1号建物P10



① 1号建物P11



② 2号建物P2



③ 2号建物P6



④ 3号建物P3



⑤ 4号建物P1



⑥ 4号建物P2

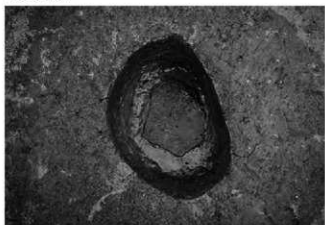


⑦ 4号建物P3

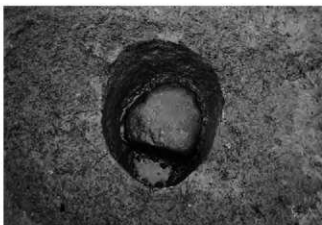


⑧ 4号建物P4

写真図版 4



① 1号柱穴列P 1



② 1号柱穴列P 2



③ 1号溝 (東から)



④ 1号溝土層



⑤ 2号溝 (南から)



⑥ 2号溝土層



⑦ 3号溝土層



⑧ 7号溝 (南から)



①7号溝土層



②8号溝 (南から)



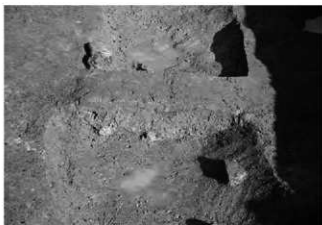
③8号溝土層



④8号溝遺物出土状況



⑤9号溝 (南から)



⑥9号溝土層



⑦1号土坑 (西から)



⑧1号土坑土層

写真図版 6



① 1号土坑遺物出土状況①



② 1号土坑遺物出土状況②



③ 2号土坑 (南から)



④ 3号土坑 (南から)



⑤ 3号土坑上面土層



⑥ 5号土坑 (南から)



⑦ 9号土坑 (北から)



⑧ 糞坑出土状況



11-9



11-27



11-28



11-29



11-62



11-63



11-65



11-66



11-67



14-31



14-32



14-33



16-1



17-1



17-2



18-1



18-3



18-4



18-5



18-6



18-7



3号建物P3柱木

報 告 書 抄 録

ふりがな	じげんざんいせき 7じ
書名	慈眼山遺跡7次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第95集
編著者名	渡邊 隆行
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2010年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
慈眼山遺跡7次	大分県日田市 上城内町1025 番地	44204-6	204134	33°19'41"	130°56'37"	071113 ～ 071220	188㎡	宅地分譲地 造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
慈眼山遺跡7次	集落	中世	掘立柱建物 溝 土坑 ピット	土師質土器 陶磁器 瓦 木器 鉄器	

要 約	<p>慈眼山遺跡は、日田盆地東部の標高87mの沖積地に位置し、中世の日田を支配した大蔵一族の居城といわれる慈眼山を北に望む集落跡である。7次調査は遺跡中央部付近で実施し、大規模な整地層上面に中世後期の15世紀～16世紀にかけての掘立柱建物群や溝・土坑などが掘りこまれていることが確認された。これらの遺構群は東西南北に整然と並びまた複数度にわたって作り直されていることから、一定期間かけて計画的に地割りが行われたものと想定される。なかでも瓦類や刀装具の出土などから、武家屋敷の可能性が想定されるとともに、焼けた痕跡のある遺物の存在から、火災等の可能性が想定される。</p>
------------	---

慈眼山遺跡7次

日田市埋蔵文化財調査報告書第95集
2010年3月31日

編 集 日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発 行 日田市教育委員会
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印 刷 尾花印刷有限会社
〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8



日田市